

大井町立大井小学校

研究テーマ：「考えた」「わかった」を重ね合わせた授業づくり

1 実践の目的

研究主題の「考えた」とは、思考の大切さ
を表している。「考える」ではなく「考えた」
としたのは、過程で終わるのではなく、自分
なりの見解まで見通せる力を育成してい
きたいと考えたからである。思考を繰り返
していくことで、練られた思考へと近づく
ことができるようにしていくことをめざした。

「わかった」とは、考えたことから理解へ
の道筋を表している。自分の考えたことを
他者に伝えることで考えを整理し、少しづ
つ学習内容の理解に導かれていく。表層的
に「わかる」という段階ではなく、深い学
びとなるよう「わかった」という理解にた
どりつけるよう指導を行った。

最後の「重ね合わせていく」は、少しづ
つ「わかった」ことを伝え合うことで、学
校という集団で学ぶことの意義や個々の
考えを伝え合う目的にもなる。これらの
ことを踏まえ授業を行っていくことで、
学習指導要領に掲げられている「対話
的」「深い学び」が達成されると考
えた。

2 実践の内容

(1) 授業経営

① 1時間ごとの発問を明確に提示する

児童の困り感から始まる本校の授業展開
では、先を見越した教師の発問が最重要
である。そのため、「～しよう」や「～を
考えよう」といった着地点が曖昧なもの
ではなく、「どうして～だろうか」のよう
な疑問系の発問にすることを共通理解と
した。

② 児童の「わからない」から始める授業

どの教科においても、教師が「今日は～
しましょう」と発した時点で、児童は受
動的立場に回る。「立式できない」「立
式できたが、なぜ答えがこうなるのか
説明できない」と発言することは、主
体的に学習内容をわかろうとしている
重要な態度の表明である。ここから
始めることで研究主題に迫ることが
できると考えた。

③ 聞き方・話し方ステップシートの活用

「型の指導」ととられるのではなく、
考えの伝達のための手段として児童
に根付いていることを重視していく。
今年度1年間かけて、実践とともに
内容を検討した。

(2) 教室環境

① 学びの場の整備

教室が整理され、集中できる雰囲気
であることや、教室前面の掲示物に
配慮し、黒板に書かれていることに
意識を向けやすい状況にあること
などについて留意した。

② 自分の思いを伝えられる雰囲気

児童が安心して自分の意見を表現
できる学級風土は、教師が意図して
創り上げていくものである。「ここ
がわからない」や「この解き方で
困っている」と自信をもって表現
でき、周りもそれを温かく認められ
ることが、授業における学習規律
であるという観点に立って指導を行
った。

③主体的に取り組む雰囲気

自らの学習問題に対して試行錯誤しながら乗り越えていく過程に楽しさを発見し、充実感を味わうことができるよう指導にあたった。

(3) 幅広い教師のスキルアップ～ミニ研修～

昨今、教育現場には様々なニーズが求められている。業務を効率的かつ有効に行っていくためにも教師自身のスキルアップが必要だと考え、それぞれの教師の得意分野において自由研修会を実施した。

3 実践の成果と課題

(1) 教科の視点

算数において、アンケートの結果では、全学年共通で「問題が解けたとき」を好きな理由にしている児童が一番多い。成功体験が最も大きな楽しさの源泉であることがわかる。また、3年生は「新しい考え方や解き方を発見したとき」が次に多く、発見の喜びが大きいことが伺える。5年生は「友達と教え合いや話し合いをしているとき」が次に多く、協働的な学習への意識が高まっている。

学年別で比較すると、4・5年生で「好き」の割合が低下しており、特に3年生との差が目立つ。学年が上がるにつれ、既習内容を複合的に扱うことが必要になり、習得が不十分な部分があることで、学習理解に影響が出ていることが考えられる。

道徳では、意欲的に学習できる活動として、3・4年生では、「登場人物の気持ちを考えているとき」が最も高い傾向があり、教材文への共感や心情を考えることに関心が高いことが伺える。5・6年生では、「友達の意見や考えを聞いているとき」と回答する児童が多く、他者の多様な考えを知るこ

とに楽しさを見出す傾向が強い。

(2) 授業経営

学ぶべき内容を念頭に置きながら、児童の実態に合わせて実践を重ねていくことができた。研究会での授業提案に限らず、「もっとこうすればよかった」という意識と改善策を教師がもちながら日々の授業にあたることができたと考える。今日の学びを次の日に活かすという思いを教師も児童ももち続けることで、よりよい授業づくりを行うことができた。今後も授業のツールとなる、聞き方や話し方を6年間通じて学び続けられるようにしていきたい。

4 今後の展開

～児童や教員のアンケート結果より～

算数においては、「問題が解けたとき」が児童の学習意欲に深く結びついていることから、問題の難易度設定やスモールステップの導入により、「わかる」「できる」の成功体験をより多く積ませる工夫が必要だと考えられる。また、5年生で高かった「友達と教え合いや話し合い」を充実させることも、苦手意識の解消や学力向上につながる可能性がある。

道徳においては、6年生の「好き」の割合が低下していることから、3・4年生で高かった「登場人物の気持ちを考える」学習からさらに発展させ、「友達の意見や考えを聞く」や「交流し、新たな気づきを得る」といった他者との対話を重視した活動を意図的に増やすことで、学習への意欲を維持・向上できると考えられる。

これらの授業内容の改善を図りながら、授業経営の質を向上させる必要がある。算数や道徳に限らず、全ての学習において教師も児童も考え、わかったと感じられる授業をめざしていきたい。